

◆ 園芸品目を拡大し、あなたの夢をかなえよう！ ◆

管内ではアスパラガス、きゅうり、ミニトマト、トマト等収益性の高い園芸品目が農業経営の柱となっています。これらの品目に新たに取り組む方や面積を増やす方、法人化した方等が、積極的に農業経営を拡大・安定させようとがんばっています。あなたも園芸品目を拡大し、夢をかなえましょう。

ここでは億の販売額を誇る3品目について紹介します。

○アスパラガス ～ 共同選果場を利用し、経営規模を大きく！ ～



アスパラガスのハウス建て

・露地とハウス、あなたにあった栽培を

喜多方地域のアスパラガスは、主に露地2期どり栽培（春と、夏～秋まで収穫する栽培）、ハウス2期どり栽培（ビニールハウスで栽培）の作型があり、特にハウス栽培では高い収益を上げることができるようになりました。

アスパラガスの定植年は株養成期間となり、本格的な収穫は2年目の夏からになります。順調に生育した場合、最も収量が高くなるのは定植5～7年目で、株更新は10～13年が目安です。成園（定植4年目以降）

の目標とする10aあたり収量は、露地栽培で1,000kg、ハウス栽培で2,000kgです。

・ハウス栽培で4月出荷、狙える高単価

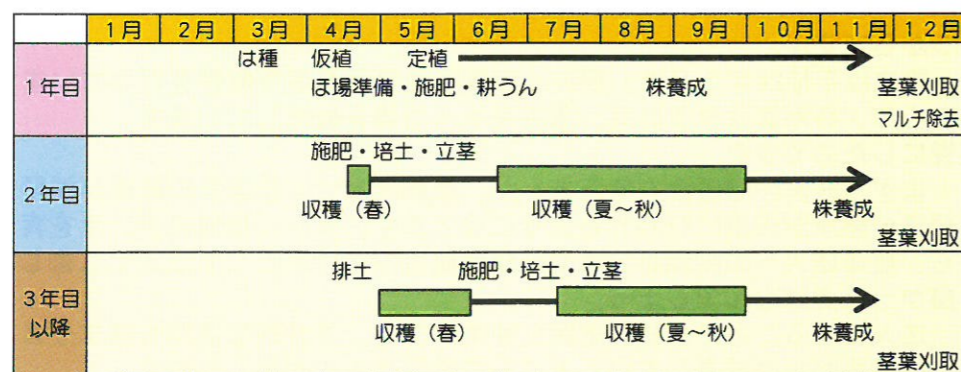
アスパラガスの年間における平均単価は、露地栽培で800円/kg、ハウス栽培では1,000円/kg程度です。ハウス栽培の平均単価が高いのは、4月上旬から中旬の、露地栽培が本格的な収穫期を迎える直前の高単価な時期を狙って出荷できるためです。

したがって、目標収量が確保できた場合、露地栽培では80万円/10a、ハウス栽培では200万円/10aの収益が見込めます。所得率は露地栽培で50%、ハウス栽培で35%程度となります。

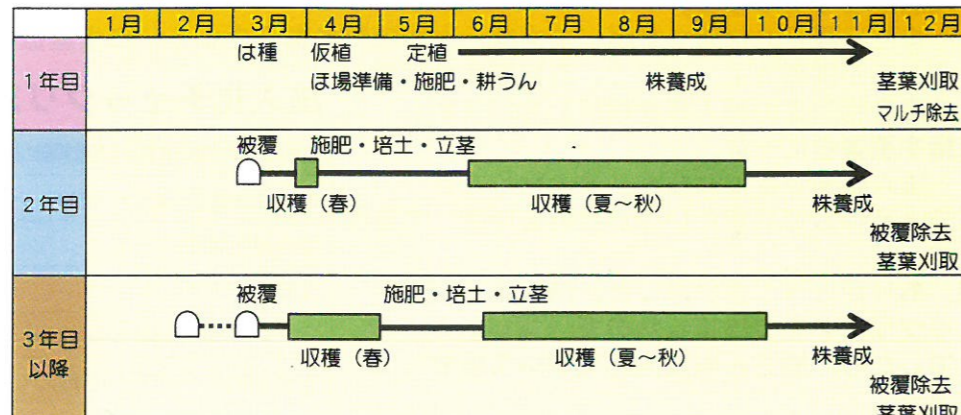
・共同選果場利用、30～50aの作付けを目指そう

アスパラガス栽培で最も労力がかかる作業は、収穫・調整作業ですが、喜多方地域では共同選果場（山都、熱塩加納、会津若松の3か所）を利用することによって、選別や結束にかかる時間を大幅に削減できます。このため、一戸あたり（2名で構成される経営体を想定した場合）、30～50aの作付けが可能となり、アスパラガスを経営の柱とした農業経営に有利な条件となっています。

●露地2期どり栽培



●ハウス2期どり栽培



○きゅうり ～ 長期間収穫であなともとうろ、10アールで10トン～！ ～

・あなたの夢をかなえる夏秋きゅうり

喜多方地域の夏秋きゅうり栽培の歴史は長く、昭和45年に野菜指定産地の指定を受け、以来生産者の農業経営を支えて来ました。平成27年度は14.5ha、125名で生産され、約1,650tを出荷しました。きゅうりを経営の柱とする法人も誕生し、面積と出荷量が増えています。平成27年度は新規栽培の方々が平均単収で8トンを取りました。ハウス栽培で、面積20a一、単収10t一を目標に、あなたもきゅうりで経営を豊かにしませんか。



きゅうりの現地指導会

・病害虫防除と草勢管理で11月までいきいき

高温乾燥でハダニが発生しています。ハダニは葉の裏側をよく見て、見つけたら早めに防除をします。ホモプシス根腐病は土壌消毒で菌密度を低下させ、また転炉石灰の投入により土壌pHを上昇させることで被害の拡大を防ぎます。

そして何よりも、きゅうりの生育状況を診断・把握し、先を見据えて整枝・摘葉・追肥・灌水等の草勢管理を着実にやり、元気なきゅうりで11月末まで収穫しましょう。

・仲間とともにレベルアップ

旧J A会津いいで夏秋きゅうり部会では生産者のほ場を生産者とJ A・種苗会社・資材会社・普及所の関係者で毎月巡回し、きゅうりの姿を見ながら栽培管理の仕方をみんなで検討して栽培技術の向上に取り組んでいます。形のよいきゅうりが長期間とれ、出荷できるように、そして売上げがアップするようにみんなががんばっています。

○ミニトマト ～ 需要があり、価格も安定、ミニトマト！ ～

・歴史を積み重ねるミニトマト

喜多方地域のミニトマトは、昭和55年に旧堂島農協管内で希望の野菜として、若い農業者が中心となって取り組みが始まりました。あれから35年、『堂島チェリートマト』は新規生産者数や戸当たりの栽培面積を増やし、平成27年度は7.0ha、53名で生産し、約367tを出荷しました。面積20a一、単収6t一を目標に、あなたもミニトマトを経営の柱にしてみませんか。

・気をつけよう、ハダニと高温

春先の乾燥によりハダニ類等の虫が多く、また夏期の高温により花落ちが発生し、9月の出荷量が減少する傾向にあります。対策として、5月中旬から発生するハダニ類については、田植え前後に防除を一度行い、また、高温については、遮光幕の設置やハウスビニールつま面の開放を行います。最近35℃を超える日が数日あるので、その時はマルチの除去やハウスビニール裾の開放も行って花落ちを減らし、9月の出荷量確保を目指しましょう。

・活動を始めた若い生産者たち

旧J A会津いいでチェリートマト部会では、平成25年1月より、20～40代の若い生産者を中心とした「研究会」を設立しました。新規生産者、栽培年数が浅い生産者や後継者が、先進地視察や肥料等の試験を自ら企画、実施し、技術の研鑽や生産者同士の交流等の活動をしています。

・新たな取り組みバラ出荷

現在は個人で選果機やパック詰め機を購入し、個選を行っています。7月の出荷ピーク時には相当な労力が必要となり、規模拡大を阻んでいます。そのため、パック詰めを行わないバラ出荷を試験的にやり、規模拡大や新規生産者の確保を目指しています。

